

サンゴ礁が震えた日

漆黒の宇宙を背景に浮かぶ青い地球、広大な太平洋には雲が流れ宝石を散りばめたよう。グアム、ビキニ、エニエトク、南太平洋のマルロアとサンゴ礁の島々が連なつている。現地の言葉で「大きな秘密の場所」マルロアのサンゴ礁に衝撃波が走り、青い海が一瞬のち白濁して盛り上がった。フランスの地下核実験の爆発のその時、サンゴ礁が震えた。

かつて一九五〇年代を中心にビキニ環礁などでは大気圏内核実験が続けられた。ビキニにおける水爆実験では一百キロm離れたロングラップ島に住む人々は島の西でさく裂した水爆の閃光と東の空の日の出とふたつの太陽をみた。そして爆発によつて空気は震え巻き上げられたサンゴの粉とともに死の灰が降ってきた。この付近は北東貿易風に位置しており、死の灰は南西に向かつて流れれるのが普通だが、この日は逆に西風に乗つて島を襲いカツオ漁船の第五福竜丸をも直撃した。

打ち続く核実験による放射能汚染が地球規模で拡大し、神が作った空気は、つくりたてのパンのようにかぐわしくおいしいものだが、原水爆の爆発は始まつてから、もはや空気は信用を失い、疑いながらすわれるものとなつた。空気にはもはや詩がなくなつた。

「た」と荒垣秀雄 天声人語、一九五五年朝日新聞)をして嘆きが聞かれた。

大気圏内での核実験が禁止された一九六三年の年は、皮肉にもそれまでの恨みが「氣にでたような地球規模の異常気象となり日本ではサンパチ豪雪となつた。成層圏でも見事な突然昇温がみられ、数十年あるいは数百年に一度という大気の大きな偏りによって地球の回転のスピードが狂つた年となつた。マルロア、ファンガタウファ環礁とあわせて過去三十年で百回にもおよぶ地下核実験が行われ、いまなお土台の火成岩の岩盤に爆薬をしかけてサンゴ礁を震えさせる日が続いている。空気からも信用されなくなり、海のなかで地球環境の番人の役割をもつサンゴ礁からも信用されなくなつてしまつた。いずれ自然からの厳しいシッペ返しを受けるのではなかろうか。